

『発生の中から』

江口博子

今まで、佐賀大学美術館で鑑賞するのは、アール・ブリュットや学生の卒業展、子ども達の書道や絵に心癒やされ、心動かされていた私ですが、今回の展覧会は、いつもの美術館の光景と違いました。

鈴木さんの作品は、視覚や聴覚にも楽しめるものでした。

理科系出身のアーティストさんと知り、らしく機械的な動きと音が、あの静かな美術館の中に心地よく響いていました。数点の作品は、どれも飽きない遊びゴコロ満載の作品だと思います。

特に、『波風を立てる』は、題名の通り人間同士の物事を機械を使って、レースのリボンが波風を表し、人間くさい機械に可愛さを感じてしまいました。

チェさんの作品は、すごく好きな表現でした。

作品は、日本、韓国、中国の今の難しい現状を分かりやすく表現してあるのが良かったです。しかも、土台にダンボールを使ったことで、ポップでカジュアルな明るい印象で、手書きの文字もキレイ過ぎずいい感じでした。

平面作品ですが、ビデオがあることで動きがあり、見る人に、重ねて訴えかけている様で、とても印象に残りました。

日本画として観たらいいのか、どの分野で見ていいのかとても悩んだのが、福田さんの作品でした。

本日、鑑賞されてカフェにも来て頂いた方と、福田さんの作品について話しました。

余り、好まれてはいらっしやらなかった様でした。それは、あの薄暗い空間の中にあるのが…と、言われました。

確かに、どの作品とも違った雰囲気があります。

閉鎖的な空間の中で、金や銀の輝かしい色が使われており、きっと光が当たったら、眩いばかりの光を放つだろうに、なぜ、影に囲まれた空間に置かれなければならなかったのか、私には、「昔の自然（自然光をまとう風景）」を表現されているように感じられました。くるっと半端に巻かれた物を木々の葉のように、左右の四角は、平野や山々のように見えました。

福田さんの作品より感じとれたものは、あの薄暗い空間は、遠い昔、電気が無かった頃の自然な明るさだと思いました。それに、作品に使われた物は、昔から日本で使われている伝統的な工芸品を主に使って表現される事が、遠い昔から有る素晴らしい物で、当時の表現者や鑑賞者が見たであろう空間を現代に再現されたのだらうと解釈しました。

上村さんの作品は、穏やかな日常が伝わってきました。

お子さんの書かれたものや、握って型どられたもの、いつも側にある物を作品にされています。

上村さんにとって、お子さんの存在が何よりも、大きく、かけがえのないものだと分かります。

作品の中心にある巨大な積み木の色合いが、とても鮮やかです。

そんな温かさを感じるイメージの作品を叶うなら、小さな子ども達が遊ぶ公園などに展示して触れてほしいと思いました。

今回の展覧会は、

世代や表現方法は様々でも、作品の意味、アーティストが伝えたい事の奥深さをどの作品にも感じとれました。

それに、鑑賞されてアートカフェへ来られた方々が語られるのは、いいものを見れたと感動されたり、子どもの落書きをアートとして表現するのがすごい！、見始めは、よく理解できなかったがカフェで話してようやく理解できた、と喜んで頂いたり等発生の場を通して、それぞれの状況でですが、心の変化がたくさんあったことが、わかりました。

アートは、見ただけでは理解できないし、一つ一つ物語が隠されているものだと、改めて感じました。